

【緑地を楽しむ本】

『パンプキン！』 模擬原爆の夏

令丈ヒロ子 作 宮尾和孝 絵 講談社



8月は例年6日から始まり15日まで、原爆被害者や戦争体験者の多くの証言がテレビで取り上げられます。戦争を体験した方たちが高齢になっていく中で、少しでも多くの体験を伝えてもらいたいという思いで見えていました。

だから原爆についてはかなり知っていると思っていたのに、この本を見て、タイトルの「模擬原爆」の意味がわかりませんでした。

1945年8月9日、長崎に投下された原爆と同じ形をした爆弾、ただし核物質は積んでいない模擬爆弾を、アメリカ軍は7月20日から8月14日にかけて49発も落としました。それは、原爆がしっかりと目標地点に投下されるように、また飛行機のパイロットが爆風に巻き込まれなように訓練するため、原爆の模擬

飛行だったのです。

アメリカはそこまで用意周到に、原爆での大量殺戮を計画していたのか…改めて、戦争というものがいかに人間を狂わせるかということに、ゾッとしました。

本書では大阪市東住吉区に住むヒロカが、近所にある模擬原爆の碑を知り、夏休みの自由研究にしていくなでいろんなことを感じ、考えていきます。多くの子どもたちに、そして私のような大人にも、こんな事実があったということを知ってほしいと思いました。

「いろんなことを知っていくと、結局誰が悪いののかも、わからへんようになるな」

「知らないことは、こわいことだよ。誰かの言うてることが事実とちがっていても、そうなのかなあって信じてしまう。ぼくはそれがいやなんだ。」ヒロカといとこのたくみの言葉に、深くうなずいている自分がいました。

(小川)